
Love War !

夕氷嘩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love War!

【Nコード】

N9166J

【作者名】

夕氷嘩

【あらすじ】

高校2年生の佐竹雫（すく）は、家庭の事情で県内の全寮制の学園に転校してきた。

だけどこの学校…男女の仲が壊滅的に悪かった!?

男女戦争に巻き込まれつつ、雫が出会ったのは…。

ドタバタ恋愛小説（になる予定）です。

V S 1・「首尾は上々？」

「佐竹^{さたけ}さん、ここがあなたのお部屋、304号室よ」

そう言われて、目の前にある木造りのドアを、私はじっと見つめた。確かにドアの上の方に「304」という数字の、洒落たプレートが飾られている。

「ルームメイトの、あなたと同じ2年生の渡辺^{わたなべ}美保^{みほ}さんに細かい説明をあなたにしておくように頼んでおいたから。後は渡辺さんに聞いてね」

「はい」

「じゃあ、私は用事があるからこれで。また詳しい寮の説明とかは追々していくから…分からないことがあったら、いつでも聞いて頂戴。始業式に遅れないようにね」

「はい、ありがとうございます」

そう言い残すと、女子寮の寮長を名乗る「前原」という黒髪ロングの美人は、颯爽と姿を消していった。その後ろ姿を見送ってから、小さく息をつく。

目の前の扉を凝視しながら、緊張して高鳴る胸を必死に落ち着けようと、私はゆっくり目を閉じた。

ああ、駄目…落ち着け、自分。

私こういつの、本当に苦手なんだよね。

先程ここまで案内してくれた前原さんの話によれば…、自分のルームメイトだとかいう女の子はこの部屋の中にすでにいるはず。

こんな事で尻込みしている自分が馬鹿みただけど、緊張するものは緊張するのだ。

見知らぬ、しかもこれから生活を共にしていく子との初対面…
一体どんな子なんだろう？

ええい！いくぞ！

意を決して、扉をノックしようとした時だった。

「ガチャッ」

「痛っ！」

「えっ？」

突然、顔面に降りかかった衝撃に、痛すぎて思わず床にしゃがみ込む。

な、何が起きたの…？

事態が呑み込めず、じんじんと痛む顔を手で覆っていると、上から慌てたような声が聞こえてきた。

「え、えっ？ご、ごめんなさい！…どうしよう、やだ。あの、大丈夫ですかっ！？」

「あ、いえ…大丈夫ですから」

痛みを堪えて体を起こすと、目の前には心配そうな表情を浮かべて、ひとりの可愛らしい女の子がこちらを覗き込んでいた。

うわぁ…猫みたいなお子だなぁ…

びっしりと睫が生えた、大きな猫目。
肩ほどまでに整えられた薄茶の髪は、ゆるくカールしている。
身長は私と同じぐらいだから…結構小さめ、なのかな？

って、あれ？

もしかしなくても、この子…

「あの…、もしかして佐竹さたけ、雫しずくさん、ですか？」
「あと、それじゃあ、渡辺美保さん？」

お互い少しの間瞬きして顔を見つめ合っていたが、しばらくして気が緩んだように、ほっと笑みが浮かんだ。

そりゃそうだよね。

この目の前の部屋から出てきたんだもん。

この部屋の住人以外に他ならない。

「あ、じゃあ改めまして、渡辺美保です。これからよろしくお願いします」

「こちらこそ…佐竹雫です。雫、って呼び捨てでいいよ」

「本当？じゃあ私も、美保って呼んでもらえると嬉しいな」

「了解！」

にっこりと微笑んだ美保につられて、私も笑顔になる。

良い子そうで、心底ほっとした。

これで性格の悪い、ケバイ女の子だったらどうしようかって、ちょっと怖かったんだよね。

「あつ、それよりも顔大丈夫だった？ごめんね。私、突然ドア開けちゃったりして…痛かったよね」

「うっん、大丈夫だよ。私があんなところではーっと突っ立ってたのがいけないんだし…気にしないで」

美保だって相当びっくりしたはずだ。

まさかあんなところに、人がいるなんて思いもしなかっただろう。

「本当にごめんね。あ、中にどうぞどうぞ」

「うん、ありがとう」

案内されて、中に入った部屋は、思っていた以上に広くて驚いた。

「結構広いんだね」

「びっくりしたでしょう？私、『渡辺』だから出席番号が一番最後で…生徒数が奇数だったから、ひとりだけはぶれちゃって寂しかったんだよ。この部屋広いから余計に…。だから雫がこの部屋に来るって聞いて、本当に嬉しかったの」

照れたようにそう言う美保の可愛さに、くらりと眩暈がしそうだった。

ああ、もう…

こんなに良い子をルームメイトにしてくれて、神様仏様本当にありがとう！

今回ばかりは貴方たちの存在を信じます、なんて適当なことを考えながら、部屋の内装をぐるりと見回す。

「雫の荷物は、雫の部屋に運んでおいたよ。こっちの右側の部屋がそうだから」

がちやりと扉を開けた部屋は、6畳ぐらいのシンプルな家具で統一

された部屋だった。

机とベッドとクローゼットと…ベッドの脇には確かに、自分のトランクが置かれている。

「お風呂とトイレはこっちで…兼用のリビングがここね」
「キッチンまであるんだね」

どんだけ揃えがいいんだ、この部屋は…

大体、お風呂とトイレが兼用なのではなく、各部屋に1つずつ付いていることも驚きである。

さすが県内でも屈指の有名進学校、とでも言うべきなのか。
学生なら学生らしく、もう少し質素なものでも良い気がするけど。

「うん、でも私も滅多に使わないよ。ご飯は食堂で食べてるし…たまにお菓子を作ったりするぐらいかな？」

「ふーん、そうなんだ」

「うんうん。…あつ、そろそろ始業式の始まる時間だね。詳しいことはまた色々説明するから、とりあえず今は講堂に向かおうか。今日は始業式の後は何もないから、暇なはずだし」

美保の言葉に頷くと、私達は部屋を後にすることにした。

ルームメイトは優しげな可愛い女の子。

今のところ、首尾は上々…なのかな？

v s 2 ・ 「それは、思いがけない」

少しずつ、景色は秋の色に染まり始める 9月。

校舎にまで伸びた、等間隔に植えられた銀杏の木々が黄色く、徐々に衣替えを始めようとしている。

抜けるような空は青く、高い。

そんな美しい景色を眺めて、私は目を細めた。

講堂は…一体どこだったか。

そう、秋の景色に和んでる場合など露ほどにもない。
どこにもない。

腕時計に目をやると、針はすでに9時45分。

始業式は10時からの予定だった筈だから、急いで戻らなければ間違いなく遅刻だ。

初日早々に遅刻のレッテルが貼られてしまうのは、いくらなんでも避けたい。

そんなレッテルが貼られた転校生になどなりたくない。

ああ〜もう。

こんなことなら、美保に付いて来て貰えば良かった。

寮を出て講堂に到着した瞬間に、まさかのトイレに行きたくなってしまう私は、慌てて逆戻り。

「一緒にいこうか？」と言ってくれたせつかくの美保の言葉も断り、校舎の方の近くのトイレに駆け込んでみたはいいものの、あまりに

も焦っていたせいか講堂までの道順をすっかり忘れてしまったのだ。

左右見渡しても見覚えのない道だけで、焦燥感だけが募っていく。

「どつちだったかなあ……」

ああ、困った。

私、筋金入りの方向音痴だったんだよね、そういえば。すっかり失念してたよ、本当に大馬鹿。

こんな時、神様の如く誰か通りかかってくれたら……って、え!?

視界の前方に、背の高い男子生徒と思われる人物が見えて、思わず目を瞠る。

迷っている暇などなかった。

ナイスタイミング……これぞきつと神の啓示!

男子生徒の元まで慌てて走り寄った。

「あのっ、すみません!!!!」

「え?」

驚いたように足を止めたその人に、寧ろこちらが驚いてしまった。

今時の芸能人のように無造作にセットされた茶髪に、精巧な顔立ちすれ違う女の子は誰だって彼に振り向くだろう、というぐらいカッコいい。

そこらへんの芸能人やモデルなど比にならないぐらいだ。

背も遠目で見ても、実際間近で目の当たりにする方が断然高く感じられた。

180はありそうだ。

私は153しかないから、彼の顔を覗くためには首が疲れる。
正直羨ましいといか、恨めしい。

ああ、ってそんな事今はどうでもいいんだった。

「すみません、講堂の場所って知りませんか？」

「講堂？」

一瞬怪訝そうな表情を浮かべたその男子生徒は、しばらくして納得したように「ああ」と小さく呟いた。

「もしかして、君、転校生？」

「はい。ちよつと道に迷ってしまつて…」

「ふうん、なるほどね」

面白そうに唇の端を上げた目の前の男に、一瞬いらつとするのを抑えられなかった。

何が面白いんだ…何が！

無駄に良い男だからって、全国女子全員に共通するなんて大間違いなんだからね！

「あの、教えて頂けないでしょうか。無理そうだったら他の方に頼むので別にいいのですが」

「いいよ、ついておいで」

さらりと爽やかな笑顔でそう言うと、男は歩き始める。

内心ものすごくほつとしている自分がいて、思わず苦笑してしまっ

た。

自分の刺々しくなってしまった物言いに、言った後すぐに後悔してしまっていたからだ。

ここはどんなに嫌でも謙ってお願ひするべきであったから。

もしここで断られてしまっていたら、間違いなく遅刻のレッテルが現実化してしまうところだっただろう。

ほとんどの生徒はもう講堂にいるはずで、この辺りを通りかかる人など、この男子生徒以外見つけることはほとんど不可能だったはずだ。

寧ろ、なぜこの男がこんなところにいたのか、という疑問が湧いてくる。

…って、これから関わり合う事は金輪際ないだろうし、別に関係ないから良いのだけど。

「転校生ってことは、君は1年生？」

「いえ、2年生です」

「ふうん、僕の1こ下か。この時期に転校してくるなんて珍しいね」

「ええ、まあ…」

他愛無い話を持ちかけてくる男に、適当に答えていく。

別に気なんて遣わなくていいのに…講堂まで案内してくれればそれで。

はあ…早く講堂に着かないかな？

知らず知らずのうちに、ため息を付いていたらしい。

男がくすくすと笑うのを耳にして、ハッと意識を引き戻す。

いけないいけない…
いくらなんでも失礼だったかも。

曲がりなりにも、こっちは案内して貰っている立場な訳なんだし。

「…す、すみません」

「いや、別に構わないよ」

にこにこと、人の良さそうな微笑を浮かべている男に、思わず噴出してしまった。

「変わった方ですね」

「そうかな？そういう君はリスみたいで、可愛いけど」

「はあ？」

聞き慣れない言葉に、自分の耳を疑ってしまった。

リスみたいで、可愛い？

徐々に自分の顔が熱くなっていくのが分かる。

「な、な、なに言って…」

「本当だよ。あ、ついたみたいだ」

「え、あ…」

言われるがまま視線を先にやると、確かに先ほどの講堂の白い建物が前に見えた。

「じゃあ、僕はこれで。今度は迷子にならないように気をつけて」

「あの、ありがとうございました」

「いえいえ」

ひらひらと軽く手を振って、男は先に講堂の中へと入っていった。
まった。

なんだったんだろう、あの人。
不思議な人だったけど…

首を傾げながら、私も慌てて講堂の入り口へと向かった。

「あ、雫、こっちこっち」
「美保！」

美保の姿を目に留めた私は、人混みの合間を縫って急いで駆け寄った。

美保がほっとした表情で言う。

「良かったあゝもしかしたら雫、迷子になっちゃってるんじゃない
かって心配だったの」

ギクリと思わず背筋が強張るのを隠しながら、曖昧に微笑む。

「あははうん、何とか大丈夫だったよ。ありがとう」
「ううん、間に合って良かった」

なんて良い子なんだろう。

感動で涙が零れそうになるのを堪えていると、講堂に大きな鐘の音

が響き始めた。

「あ、始まるみたいだね」

美保の言葉で壇上へと目を向けると、ちょうど学長の挨拶が始まっていたところだった。

白髪混じりのお爺さん、って感じのいかにも学長らしい人だ。長々と話が続きそうな雰囲気、欠伸を噛み殺す。

「続きまして、寮長からのご挨拶です」

寮長？

夢の中に飛ばし掛けていた意識を壇上に戻すと、先程の自分を部屋まで案内してくれた前原さんが壇上にかかる姿が見えた。前原さんの後に続いて現れたのは……って、えっ!?

「ああっ!」

「ど、どうしたの? 雲」

口元に手を当てて、思わず叫んでしまった。

驚いたように美保がこちらを振り向くのに構わず、ただ呆然と私は壇上を見つめる。

あの男の人…さっきの!?

「ねえ、美保。あの男って、寮長なの?」

「え? う、うん。木塚先輩のことだよな? 男子寮の寮長だけど…雲、知ってるの?」

「知ってるも何も…」

ついさっきお会いしたばかりです。

ただどこを言ってしまったえば、迷子になった件まで話さなければならぬ事になる。

その事に気付き、途中まで言いかけて慌てて口を噤んだ。

そして暫くして、ふと講堂内に漂っている異様な雰囲気気付く。なんだかピリピリしているような…

学長の話の時はざわついていたのに、そういえばなんでこんなに今は静かなの？

そう疑問に思ってしまうぐらい、講堂内は静寂に包まれていた。講堂内にいる誰もが、神経の先を壇上にいる寮長2人に向けている、そんな感じの雰囲気だ。

「ね、ねえ。美保…これは一体？」

「うん、あのね…」

神妙そうな表情を浮かべて、美保が小さく頷く。

そして小声で聞かされた一言は、思いも掛けない内容だった。

「この学校、女子と男子がね、なんでか凄く仲が悪いの」

は、はい？

声を上げなかった私を、誰か褒めて欲しい。

V S 3 ・「やはり後悔先に立たず」

美保の話を簡単に纏めると、どうやらこういう事らしい。

いつから始まったのか、何が原因なのかも分からないが…とにかくこの学園は昔から壊滅的に男女の仲が悪いらしい。

廊下で男女が鉢合わせれば、睨み合い。

クラスでもほとんど会話が為されることもなく、あってもほとんど喧嘩ばかり。

体育祭や学園祭などでも、生徒の意見が重要なポイントとなっていくイベントでさえ、男女でいつも意見の食い違いが起きる。

そんな事がこの学園では日常茶飯事らしく、今更騒ぐような事でもないだとか。

とは言っても、ただ毛嫌いしている人ばかりがいる訳ではなく、そういった学園の雰囲気呑み込まれて何も言えない生徒もいるそう

だ。
美保もそのような感じのうちのひとりらしい。

そしてその雰囲気を作り上げている代表格が、寮長2人、前原さんとあの男だそうだ。

あの異様な空気が漂っていた始業式が終わり、寮の部屋に戻って、私はふむふむと美保の話に耳を傾けていた。

「そんなにあの2人は仲が悪いの？」

「うーん…仲が悪いというか…、前原先輩が木塚先輩に一方的に突

つかかっている、ていう方が正しいのかも」

「え、そうなの？」

「うん。木塚先輩はただ流して聞いてるって感じかなあ…。ほら、木塚先輩ってああいう人でしょ？」

「ああ…」

先程の姿を思い浮かべて、頷く。

どんな悪態も、あの人さらりと笑顔で軽く受け流してそうだもんね。

「それに皆表立っては絶対言わないけど、影で木塚先輩に憧れている女の子もたくさん居ると思うの」

「え…そうなの？」

確かにそう言われてみれば、そうなのかもしれない。

あの容姿ならば女の子に騒がれてもおかしくはないだろう。性格に関しては…よく知らないけれど。

にしても、なんて変で忌まわしき風習なんだろう。

そんな事をして一体誰が得をするというのか？

無意味に互いを敬遠し合ったところで、何も生まれるものなどないというのに。

「今の状態を誰も変えようとししないの？」

「うん…」

そう尋ねると、美保は困ったように眉を寄せた。

「良くないと思ってる人も勿論いると思うの。私だって、変だなんて思うもん。だけどこれがこの学園では当たり前になっちゃってるというか…とりあえず、前原先輩と木塚先輩、あの2人の関係が修

復されない限り難しいかな」

そこまであの2人の影響力は、大きいというのか。学園の雰囲気を作り出してしまおうぐらい。

私のそんな疑問を汲み取ったかのように、美保は続けた。

「前原先輩も木塚先輩も、過去に類を見ない、カリスマ寮長って言われているの。2人とも美人だし、カリスマ的オーラが漂っているからって」

それは、転校してきたばかりの私でも何となく理解できた。

前原さんも正統派の美人だったし、木塚という男も、一般的に見れば群を抜いてカッコいい部類に入るんだろう。

あの2人が壇上に立った姿は一際目立っていた。

「だからね、女子は女子で前原先輩を、男子は男子で木塚先輩を強く慕ってる人も多いの。その中から選抜された人達だけで親衛隊も発足されてるぐらい」

「親衛隊いい？」

開いた口が塞がらない、ってまさにこの事なんだと思う。

あの2人はそんなものまでお抱えだというのか？

話のスケールが大きすぎて、眩暈が起きそうになる。

もはや、馬鹿馬鹿しすぎて話にならない。

親衛隊なんて小説やマンガの世界だけに存在するものだと思ってた。まさかこんな身近に例があったとは…

「はあ…」

駄目だ。

自分には、理解の範疇を超えている。

いくらか気を紛らわそうと、私は美保が入れてくれた紅茶に口をつけた。

紅茶独特の甘い香が鼻腔をくすぐる。

あ、アールグレイだ。

私結構好きなんだよね。

実家でも何かとよく飲んでいたことを思い出し、ふと微笑む。

「あの、大丈夫だった？紅茶、苦手かどうか聞くの忘れちゃって…無理して飲まなくて大丈夫だからね？」

心配そうに尋ねてくる美保が可愛すぎて、頬が緩む。

ああもう、なんでこんなに良い子なんだろう。

「ううん、大丈夫だよ。ありがとう。私アールグレイ大好きだし。実家でもよく飲んでたんだ」

「そうなんだ、良かった」

ほっとしたように、美保が笑う。

けれど、すぐにその表情が硬くなった。

どうしたのかと思って覗き込むと、そろそろと上目遣いにこちらを見上げてきた。

「あの…ね、訊いても大丈夫かな」

「ううん？」

何だろうと思いつつ頷くと、美保は躊躇いがちに口を開いた。

「雫、はなんで、転校してきたのかなあって思って…あつ、でも嫌だったら全然言わなくていいんだからね」

「ああ…」

確かに疑問に思ってもおかしくない。

この時期に編入というのも珍しい事なわけだし。

取り立てて隠すような事でもなかったもので、ざっと掻い摘んで事情を説明することにした。

わざわざ話すような内容でもなかったし、タイミングがなかったのもあるから。

「父親の転勤の都合で、両親共に海外に行くことになったの。その間私だけ祖父の家に預けられることになって。だからそれに合わせて、こっちの学校に転校することにしたんだ」

「そうだったんだ…」

美保が納得したように頷いた。

「でも、じゃあ雫は凄く頭良いんだね。一応うちの学校って、進学校でしょ？編入試験パスするの結構大変だったと思うんだけど」

「まあ…楽ではなかったかな」

そう。

けっして楽なんかじゃなかった。

もしこの学園に入れなければ、引き摺ってでも両親と共に海外に連れて行かれる、という約束になっていたから。

編入試験に合格する為に、どれだけ勉強に時間を割いたか分からない

い。

何故そこまでして海外に行きたくないのかと訊かれれば、理由は簡単、外国が苦手だったからだ。

食事から生活様式まで、順応できる自信が今の自分にはまったくなかったのだ。

純粹に、日本という国が好きだからというのもある。

「我ながら子供っぽい理由だとは思っただけどね……」

「えっ？」

「ううん、何でもない」

泣く泣く海外へと旅立っていた両親の顔を思い出し、苦笑する。彼らは元気にやっているのだろうか。

そういえば、とふと疑問に感じた事を口にしてみる。

「あのさ、話を元に戻してもいいかな？」

「うん、大丈夫だよ」

「例えばなんだけど、クラスとかでは男子も勿論一緒に過ごすわけでしょう？ここでもやっぱり男子に話しかけたりしちゃ駄目なの？」

さすがにそれはないだろう、と思いつつも訊いてみる。

しかし、美保はまた困った顔をして、返答に窮しているようだった。

はい？

いやいや、そんな馬鹿な話があるわけ……

嫌な予感を抱えつつ、じつと答えを待っていると、美保がおずおずと口を開く。

「あのね、駄目ってわけではないと思うんだけど。やっぱり私のクラスも男女の仲は良くない、っていうのが事実だし。その、たまに仲良く話してたりする事があっても、こう…呼び出される、と言いますか…」

しどろもどろな返答に、一瞬何が何だか分からなかった。

呼び出される？

「まさか、何？話してたりすると、親衛隊みたいな人とか来ちゃったりするわけ？」

あはは。

そんなまさか馬鹿な…

いくら何でもそれはないか。

「す、すごい事！どうして分かったの？」

勢い良く机の上につ伏す。

誰か嘘でも良いから、嘘だと言ってください…

って、それじゃあ意味ないんだけどさ。

私の様子を見て驚いた美保が、慌てているようだった。

しきりに大丈夫かと心配して声をかけてきてくれる。

だけどそんな事に構っていられるほど、今の自分には心に余裕はなさそうだ。

ごめんね、美保…

ちよっただけ時間を頂戴。

すでに脳内の許容量を超えちゃってるみたい。

「あ、あのね、でもね、見つからなければ大丈夫だよ。堂々と話しかけなければ大丈夫！さすがに親衛隊のひともし一人一人の行動を逐一把握しているわけではないんだし、うん」

「…うん」

なんでこの学園に転校してきてしまったのだろう。

選択肢は他にもあったのではないかと、後悔が脳裏を過ぎる。

大体両親がこの進学校でなければ駄目だ、なんて条件を提示してきたからだ。

じゃなければ、もっとちゃんと吟味できたはずなのに。

後悔先に立たず、って本当にこういう事を言うんだなあ。

明日から本格的に始まる学校生活に、私は憂鬱な気分で重い重いため息をついたのだった。

v s 4 ・ 「いぞ出陣」

「栗っ、起きて起きて」

「うーん…」

カーテンの隙間から漏れる朝日が目に染みて痛い。

朦朧とした意識でその声を捉えながら、もぞもぞと布団の中に潜りこむ。

眠い…

「栗、あと30分ぐらいで出ないと、授業に遅刻しちゃうよ」

「うっ…」

美保に身体を揺さぶられて、何とか眠たい目をこじ開ける。

ああ…そっか…

今日から授業だったっけ。

いつもと違う室内の匂い。

新鮮さと慣れない違和感を抱えながら、そんな事をぼんやりと考える。

数分して、眠気と奮闘しながら、のそりと体を起こした。

欠伸を噛み殺して、何とか布団の中から這い出る。

「おはよう…」

「おはよう、栗」

ああ、朝から眩しい笑顔だなあ…
ほんと、太陽みたいで癒される。

「洗面所は右手奥にあるから、顔を洗ったら目が覚めると思うよ」「うん、ありがとう」

目を手の甲で擦りながら、スリッパを履き、ぺたぺたと音を鳴らし
て洗面所へと足を向けた。
蛇口を捻り、冷えた水を勢い良く顔に浴びせて、ようやく意識がは
つきりとしてくる。

「ふう」

鏡の中の自分を見て驚く。

うわっ、酷い寝癖。
慌てて手櫛で髪の毛を整える。

初日から美保に変な寝惚け顔を見られてしまったのだと、今更なが
ら恥ずかしくなる。

リビングに戻ると、すでに机の上には朝ご飯が綺麗に並べられてい
た。

「うわっ、すごい。これどうしたの？まさか全部美保が？」

だとしたら、悪すぎる。

どれだけ自分は怠惰だというのか。

朝起こして貰った拳句、朝ご飯もルームメイトに用意させてしまっ
たなんて。

目を丸くして美保を見ると、美保は笑って「違う違う」と言った。

「そういえば雲に説明してなかったね。昼食と夕食は食堂って決まってるんだけど、朝ご飯だけ本人たちの自由なの。食堂でとるもよし、部屋でとるもよし。これは回線で頼めば、部屋まで持ってきて貰えるものなの」
「そうなんだ…」

凄いシステムだ。

感動して、もう一度朝ご飯に視線を落とす。

有難く朝ご飯を頂戴した後、制服を身に着ける。

この学校の制服は、前の学校に比べて可愛いデザインだと思う。形はシンプルだけど、白基調の制服は襟に黒い二本線が入っていて、胸元は大きめの赤いリボンをアクセントとして結ぶ形になっている。鏡で乱れがないかざっと全身をチェックしてから、鞆に教科書を詰める。

「出ても大丈夫？」

「うん、大丈夫」

部屋に鍵を掛け、寮の1階に鍵を預けてから、外へと出る。足を踏み出した瞬間、少し冷たい爽やかな空気が頬を撫でた。今日も秋らしい、雲ひとつない綺麗な青空が眼前に広がっている。

「良い天気」

ここまで気持ち良く晴れてくれると、何だか歌い出したくなるな。

「ほんと。この分だと、10分前には教室に着けそうだね」

「うん」

女子寮から校舎まで5分ぐらいの距離がある。

この学園の配置を大まかに説明すると、立派な正門から正面に見て、西に女子寮、東に男子寮があり、対極的な配置になっているそうだ。そして二つの寮の中間の位置に本校舎があり、それぞれの寮から校舎までは石造りの床が伸びている。

ぼつぼつと道の両端に街灯みたいなのも飾ってあったりして、本当に洒落た造りになってると思う。

これじゃあまるで外国だ。

他にも講堂・図書館・体育館・食堂といった建物があるそうだが、そこまでの場所はまだ把握しきれてない。

いっぺんに覚えると言われても無理な話だ。

徐々に覚えていけばいいや、と自分の中で勝手に結論付ける。

「あ、そうだ。私、教員室に寄らなきゃいけないんだった」

階段を上る途中で気付く。

そういえば昨日担任に、朝教員室に来るように言われてたんだっけ。やば、すっかり忘れてた。

「小柳先生？」

「うん、そうそう。その小柳先生。ごめん、美保、教員室ってどこ分かる？」

「3階の左だよ。行けばすぐ分かると思う」
「分かった、ありがとう」

お礼を言うや否や、慌てて駆け上り始めた。

日頃の運動不足が祟ってか、やけに足が重い。

何とか3階に辿り着いたときには、すっかり息が切れていた。

つ、疲れた…
左って言ってたよね。

教員室の扉を控え目にノックしてから、静かに開ける。
すると、一番手前の席に座っていた事務員のような女性が私に気付いて微笑んだ。

「どなたかお探しですか？」

「はい…あの、小柳先生つていらっしやいますか？」

「ちよつと待つてて下さいね」

小柳先生「、とその女性は立ち上がって奥の方へと行ってしまった。
その姿を見送りながら、ゆっくりと息を吐き出す。

教員室の中をじっくりと見渡すと、教員達は忙しそうに資料を持って駆け回っていたり、教員同士で話し込んだりしている。

大変そうだな、と他人事のようにぼんやり見つめていると、しばらくして奥の部屋から長身の男が現れた。

「おい、佐竹！お前なあ…」

「はい。遅れて本当にすみません」

うんざりとした表情を浮かべる目の前の教師に、即座に謝った。
先手必勝、というやつだ。うん。

この小柳という教師。

細いシルバーのフレームの眼鏡をかけていて、それが妙に本人に似合っている。

知的で鋭利な雰囲気を漂わせているが、実際は大雑把というか、外見よりずっと気さくな性格をしているようだ。

歳はたぶん、30前半といった頃か。

小柳先生は呆れ顔でため息をついた後、頭を掻いた。

「ったく…お前は。いいか、いくつか確認事項を言っておくから。時間がないから要点だけ言っぞ」

「はい」

「まずお前が編入するクラスは2年A組。俺の受け持つクラスだ。それは昨日の始業式でも確認済みだな」

「はい」

「これから俺と一緒に教室に向かって貰う。俺がお前の名前を呼んだら、後から教室に入ってきて、簡単に自己紹介をしてくれ」

うわ、自己紹介か。

嫌だな、そういうの苦手なのに…

気付かないうちに顔が少々引き攣ってしまっていたらしい。

小柳先生は苦笑を浮かべて、穏やかな声で続けた。

「二、三言で大丈夫だから。それから最後に…」

真剣な表情に切り替えて、小柳先生はじつところらを見つめてきた。奇妙な沈黙が一瞬流れる。

「何があっても、あまり気にするな」

「は、はあ…」

拍子抜けしたように、口から出てきたのは情けない返事だった。

けれど、冗談らしい雰囲気はどこにも見当たらず、ぼかんと先生の顔を見つめるしかなかった。

どういう意味なんだろう？

随分曖昧な言い回しだけど…

そう言われると、妙に身構えてしまう。

眉間にしわを寄せて今の言葉の意味を考えると、小柳先生はにっこりと歯を見せて笑ったかと思いきや、ぽんぽんと私の頭を軽く叩いた。

「ま、大丈夫だ。ほら、行くぞ」

「はあ…」

なんだか行く先が急に不安になったのは、気のせいでしょうか？

V S 5・「1」対面

気持ちに踏ん切りをつけるように、ガラリと大きな音を立てて扉を開けた。

一気にいくつもの視線がこちらに集まるのを、ひしひしと感じる。身体に穴が空いてしまいそうならい浴びせられる、痛いほどの視線。

「佐竹雫さん、だ。今日からAクラスに編入することになった。皆仲良くするようにな」

くい、と小柳先生に首で合図されて、それが自己紹介をしろという意味なんだと分かった。

私はひとつ頷いて、ガチガチに固まった足を動かし、何とか中央へと進み出る。

ああ…

だからこういうの、苦手なんだって…

教壇の前に立つと、俯けていた顔を上げた。

水を打ったように静まり返った空気。

あまり歓迎する、といった感じの雰囲気ではなかった。

ごくりと唾を飲み込んでから、言葉を搾り出す。

「今学期から編入することになった、佐竹雫、です。短い間ですが、これから宜しく願います」

当たり障りのない、挨拶。

少し間があつて、ぱらぱらと拍手が起こった。

その中に美保の姿も見えて、ほっとする。

美保が頑張れ、と口を動かしたのが見えて、私は答えるように微笑んだ。

自己紹介を終えていくらか緊張が和らぎ、冷静になって観察してみると、拍手をくれたのが女子だけであつたことに気付く。

男子は、関心はあるようだけど、ただそれだけ。

どうやらこのあまり歓迎的でない雰囲気は、男子によって醸し出されたものらしい。

この学園の実態の片鱗がさっそく見えたような気がして、私は小さく息をついた。

本当にこういう感じなんだ、この学校…

始業式の時は着席して、皆ただ静かに話を聞いているだけだったから、男女の仲が悪いかいまいち良く分からず、疑い半分って感じだったんだけど…

この分だと、美保から聞いた話は本当のようだ。

クラスの雰囲気を感じ取って、一気に現実味が帯びてしまった。

は、激しく憂鬱かも…

はたして上手くやっていけるんだろうか。

「皆分らないことがあつたら、教えてやれよ。よし、じゃあ佐竹は…小野寺の隣が空いてるな。そこに着け」

指されたのは、窓際が一番後ろの席。
いわゆるベストポジション。

日当たり良好、教師から見えにくく、寝ててもバレない特等席。

先生、わざわざ私のためにこの席を空けておいてくれたのかな？

言われるがままその席に向かい、大人しく着席してから、うっとー
瞬呼吸が止まった。

先生…

と、隣、男子なんですけど…
これって大丈夫なんですか。

顔は正面を向けたまま、自分の全神経が隣の席に注がれるのが分
かった。

冷や汗を額に感じて、咄嗟に片手で拭う。

抗議の視線を向けてみるが、小柳先生はまったく意に介さず、とい
う感じで事務的な連絡を続けている。

「最悪、俺の隣かよ」

ぼそりと隣から呟く声が聞こえて、思わず横を振り向いた。
不機嫌そうに、頬杖をつく横顔。

短く整えられた金髪がやけに目につく。

一瞬空耳かと思ったが、どうやら違つらしい。

「はい？」

「なんで俺の隣に来るんだよ。良い位置だったのに、一気にテンシ
ョン下がるだろ」

あまりに勝手すぎる言い分に、カツと頭に血が上る。目まぐるしく変わる環境に、疲れが溜まっていたのもあるのかもしれない。

後から考えてみれば、この時もつと冷静になつて軽く流すことぐらいなんて事なかったはずなのに。

「なんであなたにそんな事、言われなくちゃいけないの?」

自然と声が刺々しくなるのが分かる。

思いつきり睨みつけてやると、隣の席の男はふん、と鼻を鳴らした。

「なんだ。大人しくて気弱な奴かと思つてたら、とんだ思い違いだったみたいだな」

こちらを一瞥して、男は嘲るように笑った。

だけど私はすぐに反応を返すことができなかった。

一瞬我を忘れて、その顔に魅入る。

涼しげな目元に、鼻筋がスツと通っているバランスの整った顔立ち。いかにも不規則な生活を送つて肌もボロボロそんな不良少年かと思いきや、肌の艶やかさに啞然とする。

私だつて8時間たつぷり睡眠時間とっても、こうはならないのに…
明るすぎる髪だつて、この顔でなら許せる気がした。

悔しいけど、似合いすぎている。

「なに人の顔じろじろ見てんだよ。気持ち悪いヤツ」

「なっ…」

「もしかして見惚れてたとか?」

勝ち誇つたような顔をされて、つい大声で怒鳴り返してしまった。

「ちつ、違うに決まってるでしょ！！バツカじゃないの？」

「ああ？」

「自意識過剰にも程があるわよ。恥ずかしくないの？そんなんでちゃんと脳味噌頭につまってるの？」

早口に捲くし立てるようにして言葉を紡いでから、我に返る。

あつ、と後悔した時にはもう遅かった。

クラス中の視線がこちらに集中するのが分かって、急激に熱が冷めていく。

小柳先生も話を中断して、驚いたように自分を見ている。

さあつと一気に頭の中が白くなった。

な、なんてことしちゃったんだろう…

隣の男もそっちのけで、自分が仕出かしてしまった事に、泣きそつになった。

穴があつたら入りたいてってこういう事なんだ。

穴に入るところじゃない。

今すぐこの教室から消え去りたい。

いや、今すぐこの学園から立ち去りたい。

仮に男女の仲が悪かったとしても、上手い具合に紛れてやっていくと思つてたのに…

そんなささやかな希望も、無情にも儚く崩れ去っていく音が聞こえたよつな気がした。

転校して2日目。

すでに私の印象は最悪になってしまったようだ。

『何があっても、あまり気にするな』

…小柳先生。

せっかく頂いたお言葉なのですが、どうやら今の自分には慰めにもならないみたいです。

「そんなに落ち込むことないよ、雫…誰も気にしてないから大丈夫だよ」

「……」

せつかくの美保の言葉も、右から左へ半分筒抜け状態。

必死に慰めようとしてくれる美保には悪いとは思うのだが、当分立ち直れそうになかった。

今は休み時間なので、美保の席に避難中。

あいつの隣の席になんて、一分一秒でも留まりたくなかった。

幸い、美保の席の周りは女子で固められていたので、心置きなく落ち込むことができる。

女子に囲まれた席がこんなに羨ましいと思うなんて…すでに相当この学園の雰囲気 invasive されてしまっている証拠なのかもしれない。

先入観もあるのかもしれないけど、男子が怖い。

できれば近寄りたくないし、関わりも積極的に持とうという気には到底なれそうになかった。

心なしか男子の自分を見る目も厳しくなっているような気がする。

何もかもあの男のせいだ…

先ほどの失態を思い出して、また落ち込む。

確かに私も大人気なく言いすぎた部分はあったかもしれない。

けれど、間違いなく喧嘩を仕掛けてきたのは向こうだ。

どちらかといえば非があるのは、あの男の咎だ、と自分で自分を慰

めてみるものの、効果無し。
溜まりかねた様に重くため息を吐き出す。

「はあ……」

「あの…、佐竹さん、だよな?」

「え?」

顔を上げると、そこには何人かの女の子が囲むようにして立っていた。

驚いて目を睨っていると、彼女たちは顔を見合わせながら喋り始める。

「気にする事ないよ。あんなの、うちのクラスで良くあることだし」

「うんうん、言い争いなんてしょっちゅうだよな」

他の女の子たちも、それに同意するようにして頷く。

もしかして…この子達も自分を慰めに来てくれたんだろうか。

「確かに小野寺君がああいう風に女子に突っかかるのは珍しかったかもしれないけど…でも、この学園ではああいうのが当たり前だから」

「そうそう、男子なんて放っておけば良いのよ」

小野寺…?

一瞬誰のことを指しているのか分からなくて考えてしまったが、すぐにあの腹立たしい男のことだと思いついた。

「珍しいの?」

にしては、随分と傲慢な態度だったけど…

いつもあんな感じなのかと思ってた。
そう尋ねると、美保は困ったように首を竦めた。

「うーん、いつもはね、言い争いとか喧嘩が起きてても、小野寺君って何も言わないし静観してることが多いの。第三者的というか…我関せず、って感じかな」

「うんうん、だから今日みたいな小野寺君は珍しいよね。私びっくりしたもん」

…じゃあ何？

あの喧嘩腰な態度は私にだけだったってこと？

あの短時間で、そんなに毛嫌いされるような要素が自分にあっただろうか。

私の容姿が生理的に受け付けないとか？…そんなことを言われても生まれ持ったものなのでどうする事もできない。

というか、そんな理由であんな態度をとられたのだとしたら、理不尽にも程がある。

仮にそうであっても、その感情を表に出すのは幾らなんでも失礼なんじゃないか。

だんだん腹立たしくなってきた、表情が自然と険しくなる。

あの金髪には極力関わらないようにしよう。
碌なことがなさそうだ。

私はそう固く心に誓うと、ちょうど始業の鐘が鳴り始める。

ああ…戻らなきゃ。

休み時間って何でこんなに短いんだろう。

「大丈夫？ 零：無理しないでね」

「うん、ありがとう」

何とか引き攣りそうになる顔を笑顔にして答える。

急に酷く陰鬱な気持ちが襲ってきたけれど、何とか表情に出さないように堪えた。

これ以上、美保に心配をかけるわけにはいかない。

なかなか動こうとしない足を叱咤し、私はその場を離れる。

またあの居心地の悪い、悪夢の席に戻らねばならない時を悔やみながら。

何とか1日の授業を終えた時には、心身ともに疲れ果てていた。こんなに精根尽き果てたように感じるのは初めてかもしれない。

やっと彼女たちの言っていた意味を身を持って理解した気がする。誰もあの時の自分など、本当に気に留めるようなことではなかったのだ。

それぐらい、授業中の生徒たちの様子は凄まじいものだった。

例えば数学の時間では、黒板に書いた答えが間違っていた男の子が

いた。

最後の最後で計算ミスという、初歩的な間違い。

誰にでもある事だし、取り立てて騒ぐような事でもなかった筈だ。しかし、その間違いを、クラスの女子が徹底的に貶すのだ。

再起不能になるんじゃないかっていうぐらい、容赦なく、けちよんけちよんに。

「そんな程度の問題で間違うなんて馬鹿なんじゃないの」

「小学生でもそれぐらい出来るよね」

あんな濁流のように非難の嵐を浴びせられたら、一溜りもないだろう。

もしも自分だったら、とぞっと背筋が凍る。

そこで女子らしい、と変に感動してしまったのが、その言い方にあった。

ひそひそと小声で喋っているように見せかけて、教師には聞こえない、けれどその男子の耳だけにはしっかり届くような声の大きさを彼女たちは話すのだ。

何て陰湿なやり方なんだろう。

普通に言うより、ずっとその方が効果的で、喰らう精神的ダメージは大きいのだから。

事実、その間違ってしまった男の子も、恥ずかしさからか怒りからか、顔を真っ赤にして身体を震わせていた。

見るに居た堪れない様子に、心から同情してしまっただぐらいだ。泣き出さないだけ、ましなのかもしれない。

女子たちによる男子への攻撃は、想像以上の猛威を奮っていた。

女子に対して自分の中で「蝶よ花よ」のイメージが強かっただけに、

精神的に受けた衝撃は大きかったかもしれない。

けれど、男子も勿論そこで終わるはずがなかった。
やられっぱなしで黙り込むような性しょうであるはずがないのだ。

選択授業である、音楽の時間のことだ。

これまたひとりだけ飛び抜けて音痴な女の子がいた。
失礼かもしれないけど、お世辞でも上手とは言い難かった。

その女の子を傍目に、ゲラゲラと愉快そうに大声で笑う男子たち。

「相変わらずへった糞だなー。もうちょっと、どうにかなんないの？」

「あゝあ、俺鼓膜が破れそうだ」

酷い。

そんな身も蓋もない言い方しなくてもいいのに。

女子とは違っけど、これはこれでキツイ。
幾らなんでも直球すぎないか。

今時のギャルのような体ていをした女の子は、男子の嘲笑ていにこれ以上ないぐらい顔を紅潮させて、怒鳴り返した。

「うるさいっ、あんた達だって濁声でいつも騒音振りまいてるくせに！」

「あんだとっ!？」

「そうよ、そうよ!人の事とやかく言えるような身分じゃない癖に」
「お前らだって、きーきーいつも甲高い声出しやがって。耳障りなんだよ!」

あつという間に、音楽の授業そつちのけで、数人の男子と女子で言い争いが始まってしまった。

音楽の教師がおろおると困惑している様子が目に映る。

喧嘩を辞めるように教師が促してみても、どこ吹く風状態。

まるきり無視されてしまっていて、その教師が気の毒になった。

私はただ、その様子を他のクラスメイトと共に傍観しているしかない。

本当に、なんなのこの学園…

何も教室クラスに限った話ではない。

廊下を歩いててもご飯食べに食堂に行っても、喧嘩しているグループを絶対どこかしらで見ると。

トイレに行っても、女子たちによる男子への罵詈雑言ばりざつごんの嵐。

美保の言っていた通りだ。

お互いを牽制しつつ、学園生活を送っている。

なんて、窮屈で息苦しいんだろう。

こんなんで皆疲れたりしないんだろうか。

夕食を済ませ、寮の部屋に戻り、先にシャワーを浴びることにした。気分的に、今すぐこの疲労感を洗い流してしまいたかったのもある。

風呂場から出ると、タオルで髪の毛の水分を拭き取りながら、リビングにいる美保に声をかけた。

「お風呂お先に頂きました。ありがとうございます」

「あつ、はい」

読んでいた本から視線を上げて、美保は笑んだ。
一瞬だけ沈黙が流れる。

しばらくして見兼ねたように、美保が切り出した。

「栗…あの。今日、大丈夫だった？」

「え？」

「今日、その…色々あったし、吃驚びっくりしたでしょう？」

「ああ…まあ…ね」

言葉を濁すと、気遣うように微笑まれた。

「今日はゆっくり休んでね。私もお風呂入ってくる」

「うん…ありがとう」

「いえいえ、じゃあおやすみなさい」

「おやすみなさい」

風呂場に姿を消した美保を見て、一息つく。

今日は美保に気を遣わせてばかりだ。

軽く自己嫌悪に陥って、肩を落とす。

しばらくぼうつとその場に佇んでいたが、湯冷めしてもいけないので、自室へと戻ることにした。

大分早めの就寝になってしまっけど、この分ならすぐ寝てしまっそうだ。

ベッドに潜り込むと、どつと眠気と疲れが襲ってくる。

他にも美保に色々聞きたいことがあったんだけど…

また今度でいいか。

疲労困憊。

まさにそんな言葉がぴったりな1日だったような気がする。

私は目を閉じると、すぐに深い眠りへと落ちていった。

その翌日。

私はなぜか人の気配があまりない静かな廊下を、大量のノートを抱えて歩いていった。

腕に抱えているノートが、顎のちょうど下辺りまで積み重なって、バランスが取り辛い。

視界も悪いし、これで躓^{つまず}いたりしたらどうするんだ。

「お、重い……」

徐々に肘に痺れるような感覚が広がっていくのを感じ、ついばやきを漏らす。

なんだって、女の子にこんな事をやらせるんだろう。

こんな仕事男子がやればいいのに。

しかもこっちは不慣れな転校生なんだよ？

転校してきて早々雑用係かい！

…と誰にでもなく、突っ込みを入れたくなる。

私は、涼しげな目元を光らせていた教師を思い出した。

「色々やった方が経験になるし、学園にも馴染みやすくなるだろ」

という、もつともそんな理由を並べて仕事を押し付けてきた小柳先生。

課せられたのは、自分の担当教科である物理の課題ノートを先生の

研究室まで運んで来い、といった内容だった。

あの時、つい顔に不満が滲み出てしまったのは仕方がないよね。うん。

だって、明らかに雑用だ。それ以外の何者でもない。

そんな子供騙しが通用すると思ってるのか、先生…

私は先生の言葉を素直に受け止められるほど、純粹培養に育ってないし、おそらく10人中9人は私と同じ事を思うんじゃないかな。捻くれて上等。

不満を口に出さなかっただけでも、褒めてほしいぐらいだ。

誰かに手伝って貰えば良かったんだけど、男子にはまあ…雰囲気からして無理そうだし。

女子にも、何だか申し訳なさが勝って結局頼めなかった。

よろよろとした足取りで廊下を突き進んでいく。

とその時、視界の端に、前方から2、3人の男子がやって来るのが映った。

話が盛り上がっているのか、小突きあいながら楽しそうに喋っている。

羨ましいことだ。

ああ、まずいなあ…

ぼんやりとその光景を見つめながら、そんな考えがちらりと頭の隅に過ぎった。

だって、絶対彼らは私の存在に気が付いてない。

前見ないで話してるし、あんなに廊下の幅めいっぱい広がられたら、逃げ道なんて皆無に等しい。

こっちだって重い荷物を腕に抱えているわけだから、急な進路転換

は無理だ。

試しに「すみません」って声を掛けてみたけど、ほらね。盛り上がりがピークに達している彼らの耳に自分の声が届く筈がないのだ。

すぐそこにまで差し迫っている危険に、私はぎゅっと目を瞑る。

ぶつかる。

そう思った時には、既に遅かった。

ぐらりとした衝撃と共に、抱えていたノートがバサバサと音を立てて雪崩のように廊下に滑り落ちていく。

「うわっ、なんだあ!？」

相手のぶつかった男子が素っ頓狂な声を上げて、驚いたように体を仰け反らせたのが分かった。

だけどそんなのに構っていられる余裕はない。

こっちはこれからこの床に散らばったノート拾い上げるといって、重労働を強いられているのだ。

視線を床に落として、ついため息が零れる。

ああ。

面倒臭い事になる前に、一応謝っておかなくちゃ。

顔を上げて、目の前の男子の顔を見つめる。

盛大に顰められている表情を見て、内心苦笑してしまった。

「こちらの不注意でごめんなさい。お怪我はなかったですか？」

「あ?ああ…くそっ、ちゃんと前見て歩けよな」

「すみません」

謝罪を口にしつつ、ぴくりと眉が動きそうになる。

…それはこっちの台詞だ。

苛々する気持ちを直隠しにして、じっと耐えて待つ。

衝突した相手の男の子はこちらを思いっきり睨み付けた後、「痛え
…女って本当に最悪」とぶちぶち文句を呟きながら、集団と共に去
っていった。

必要以上に絡まれなかった事にほっと胸を撫で下ろしつつ、ノート
の回収作業に入るため私は腰を下ろす。

…普通こういう時ってさ。

「ごめんな、俺の所為で」とかなんとか言って、キラキラのオーラ
を振り撒く王子の如く、一緒にノート拾ってくれるものなんじゃない
いの？男子って。

それで「怪我はない？教員室まで一緒に持ってくよ」とかなんとか
眩しい笑顔で言って、8割方のノートをさり気無く持ってくれて、
一緒に運んでくれるのが相場だと決まってるんじゃないの？

まあ、この学園の男子にそんな気遣いを求めるほど馬鹿な事はない
と思うけど。

でもやっぱり、そういう期待も何だかんだでちょっとはあったのだ。
せめて一緒にノートを拾うぐらいの誠意は見せて欲しかった。

人気ひとけがなくなり再び静まり返った廊下で、散在したノートを一冊ず
つ広ひろい上げる。

「よい…しよっ」

腕に思いっきり力を入れて、渾身の力でノートをを持ち上げると、私は再び覚束ない足取りで研究室を目指した。

研究室の前まで何とか辿り着くと、扉が僅かに開いているのが分かった。

廊下にまで細く明かりが漏れている。

あいたく生憎両手が塞がっている為、ノックを出来るような状態ではない。ちよっとお行儀が悪いけど…

私は右足で扉を無理やりこじ開けた。

どさり、と大きな音を立てて、すぐ近くの机の上にノートの束を置く。

「小柳先生ー持ってきましたよー」

「おお、ご苦労さん」

奥の方から声がして覗いてみると、窓際で煙草を吸っている小柳先生の姿が目に入った。

淡いクリーム色のカーテンが風に煽られて波打つように揺れている。

私と目が合うと、先生が眼鏡の奥で軽く目を見開くのが分かった。

「なんだ、お前一人で運んできたのか？」

「…そうです」

ほんと、ここに来るまでの壮絶なドラマを見て欲しいぐらいだ。恨みがましい目つきで先生を見上げると、先生は苦笑した。

「誰かに頼めばいいのに」

「まあ、そんなんですけどね」

全然学園に馴染めていない転校生に、それはなかなか酷な事ですよ。先生。

そんな思いが伝わったのか、小柳先生は「ありがとな。助かった」と苦笑を深めて労わる様に頭を撫でてくれた。

うつ…一瞬ドキツとしちゃったじゃないか。仕方がない、今日の事は許してあげるか。

「そついや、どうだ？学校は」

「え？」

転校2日目にしての失態を見ていて、それを訊きますか？

私は敢えて微笑んで告げてみせた。

「ぼちぼちですよ」

「…そつか」

私の答えに先生は一瞬虚を付かれた様に瞠目したが、すぐに呆れ笑いを浮かべた。

「まあ、無理はしないようにな。何かあればいつでも相談しろよ」

「はい、ありがとうございます」

たぶん先生は、私の心情に気付いていただろう。

けれどそれ以上深追いしてくる事はなく、穏やかな視線を向けてくるだけだった。

失礼します、と言って研究室を後にする。

あんな重い荷物を抱えていたからか、すっかり肩が凝ってしまったようだ。

解ほくすように肩を小さく回しながら歩いていると、いつのまにか渡り廊下に出ていた事に気が付いた。

へえ…こんなところに渡り廊下なんてあったんだ。知らなかったな。

暖かな木漏れ日が廊下にまで差し込んでいる。興味深く見回しながら歩いていると、ふと右手に見えた光景に私は足を止めた。

あれ？

あんなところにスペースがある…

木々に囲まれていて一瞬気付かないけれど、確かにそこには空間が存在しているようだった。

腕時計で時間を確認すると、昼休みが終わるにはまだ時間がありそうだ。

ちよつと寄つていつてみようかな…

この学園広いし、色々と探検してみないと、ね。

普段面倒臭がりな分、こういう行動をとるのは自分にしては珍しいのかもしれない。

少し迷ったけれど、私は教室に戻る前に寄り道する事にした。

無意識のうちに、何かの予感を感じ取りながら。

木々を潜り抜けた先にあったのは、まるで公園のような小さなスペースだった。

一瞬ここが本当に学園の敷地内なのかと逡巡してしまったぐらいだ。噴水を囲むようにして、白いベンチが幾つかと時計台が置かれている。

こんなところがあったんだ…

中央に進み出ると、柔らかな日差しが注ぎ込む。

私はその暖かな雰囲気に身を任せるようにして、目を閉じた。

空気が新鮮…

気持ち良いな。

ここもそうだけど…学園全体がどうやら洋風を意識した造りになっているらしい。

細かいところまで拘っている、という感じが見受けられる。

さすが県内でも金持ちが集まる進学校、というべきなのか。

だけど私はこの雰囲気は嫌いじゃない。

むしろ、好きかも。

思わぬ掘り出し物に、にんまりと笑みが浮かぶ。

お昼寝をする時はここでしよう、と密かに決心する。

ぐるりと見回した感じ、他には誰もいなそうだった。

やはり意外に皆この場所の存在を知らないのかもしれない。

校舎からは大分外れにあるし、この空間は木々に覆われて紛れてい

るから見つけにくいのだろう。

…ん？

ふとある一点に目が止まった。

一番端の白いベンチから覗いているのは…もしかして髪の毛？

おそろおそろ背後から近付いてみると、どうやら誰かがベンチの上で寝ているらしい、ということに気が付いた。

所詮自分は転校生の身…すでにこのベストスポットを見つけている人がいるのは当然といえば当然。

なんだけど、何だか先を越されたような妙に悔しい気持ちに駆られて、ちっと思わず内心舌打ちをしてしまった。

しかも私が企んでいた昼寝まで気持ち良さそうにしてくれちゃってる。

「あ…れ？」

ぐるりと前に回り込んで覗いてみると、そこにはどこかで見たような顔が…

腕を頭の後ろに組み、静かに寝息を立てて目を閉じている姿はまるでどこかの国の貴公子のよう。

伏せられた睫は長く、少し癖のある茶色く染められた髪の毛は柔らかそうだ。

いいな…羨ましい。

むしろここまでくると憎らしいかも？

見た目麗しい男前に、私は少女漫画の主人公の様にときめきを覚えるというより、感心して思わず彼の顔をまじまじと見つめてしまっ

た。

思い出した。

確か…道に迷った私を講堂まで案内してくれた男だ。

そして美保の話によれば、男子寮の寮長だったはず。

「木塚、とか言ってたよね」

記憶違いじゃなければ…

確かにこれだけ顔立ちが整った男前だったら、いくら学園内の男女の間に深い亀裂が入っていたとしても、影で憧れている子は後を絶たないのかもしれない。

とその時、私の呟いた声に反応するようにして、ぴくりと瞼が動くのが分かった。

ドキツとして、内心冷や汗が流れる。

…ま、まずい。

もしかして起こしちゃった？

案の定、目の前の伏せられていた瞼がゆっくりと開かれる。

焦点の合っていないなかった瞳が、徐々に私の姿を認識していくのが分かった。

私の姿を認めた瞬間、大きく目が見開かれる。

「…」
「…」

目が合ったまま、2人の間を奇妙な沈黙が流れていく。

そりゃそうだ。

目を開けてみたら、見知らぬ（いや、1回会ってるけど）女の子が自分を覗いてるんだもん。誰でも驚くに決まっている。

「いつから、そこに？」

男は髪の毛を掻き上げるようにして身体を起こすと、そう私に尋ねてきた。

どこかまだ少し眠そうだったけれど、そう尋ねてきた視線には妙に威圧感を感じる。まるで咎められている様な罪悪感を覚えてしまいそうになるほど。

その強い視線に私は一瞬怯んだが、正直に答えた。

「数分前からです」

「…そう」

男は小さく息をつくと、にこりと思わず見惚れてしまいそうになる綺麗な笑みを浮かべた。

「君と会うのは2回目だね。まさかこんなところで会うとは思わなかったよ」

「…覚えていたんですね」

「そりゃあね」

可愛い子の事は忘れるはずがないよ、と男はさらりと笑顔で言うのける。

…なんだろう。

凄く寒い台詞なはずなのに、彼が言うと違和感をまったく感じない。寧ろ似合いすぎてて怖い。

…なんとなく女の子の扱い方とかにも長^たけてそうだしね。

「木塚…さんは、女の子苦手じゃないんですか？」

そう。

すっかり失念していたけれど…

ここは男女の仲が悪い学園…しかも彼は、男子のリーダー格を担う寮長だ。

美保は、この学園の男女の仲の悪さを助長させている理由はこの寮長2人にも起因するんじゃないかって言ってた。

そんな影響力を持つほどの男が、女子を嫌いでない訳がない。

男は一瞬目を瞞ったが、すぐに苦笑いを浮かべた。

「…なんだ。もうバレちゃったのか」

あの時は気付いてないみたいだったから、と呟く。

「そりゃ誰でも気付きますよ。あんな壇上で目立ってたんですから」

「名前まで知っててくれたんだね」

「…そりゃ有名人ですから」

バレてないなんて思ってた方が驚きだ。

それもそうか、と男　　木塚さんは苦笑を深めた。

「ああ、改めまして、3年の木塚遼平きしからひょうへいです。知ってると思うけど、男子寮の寮長なんてやっちゃってます」

「はあ…」

冗談っぽく、どこか楽しげにそう言う彼に、私は気の抜けた返事を返す事しかできなかった。

読めない人だな…

「君の名前は？」

「私ですか？」

私の名前なんか知って何か得になる事があるんだろうかと疑問に思いつつ、答える。

「佐竹、雫です」

「雫ちゃん、か。可愛い名前だね」

…まさかの「ちゃん」付けですか。

喉まで出掛かった言葉を何とか飲み込む。

いちいち気にする様な事ではないのだ。

そう自分に必死に言い聞かせて、引き攣ってしまいそうになる顔に何とか笑顔を貼り付ける。

この時、目の前の男が面白そうに自分をじっと見つめていた事なんて私は露ほども気付けなかったけど。

「あの、それで…」

先程の疑問を投げかけようと、そう口を開きかけた時だった。校舎の方から、予鈴を告げる鐘の音が響いてきた。

ハツと気付いて時計台に目を向けると、針は55分を指している。

「どうやら時間切れみたいだね」

「…そうですね」

木塚さんは、ふっと表情を和らげて言った。

「大抵昼休みはここで過ごしているんだ。もし訊きたいことがあるなら」

そこで言葉を止めて、木塚さんは私の目に視線を移した。
ドクンと大きく心臓が飛び跳ねる。

え？

優しい表情が消え、目を細めた彼から感じるのは…どこか艶かしい雰囲気だった。

思わず惹きつけられそうになるほど、瞳の奥に潜む捉えて離さない何か…

目を逸らしたいのに　　逸らせない。

だけどそれは見間違えだったと勘違いするぐらい一瞬の事で、すぐに木塚さんは極上のスマイルを浮かべる。

「いつでもおいで」

くれぐれも内緒だね。

そう擦れ違いざまに耳元で囁くように言うと、木塚さんは「じゃあね」と去って行ってしまった。

だけど彼がいなくなった後も、私は暫くその場から動けなかった。
呆然として立ち竦む。

ドキドキと心臓がやけに五月蠅かった。

な、なんなの…？

木塚遼平。

ますます彼の正体が掴めなくなったような気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166j/>

Love War !

2010年10月10日01時17分発行